

洋学史研究会
2000年4月1日
山田義裕

西インドへの旅客
— 16世紀における大西洋航海 —
Pasajeros de Indias
— Viajes transatlánticos en el siglo XVI —

ホセ・ルイス・マルティーンネス 著
José Luis Martínez

主に下記の書簡あるいは書物に基づく：

1. 僧アントニオ・デ・ゲバラ、「航海術の創始者およびガレー船中での沢山の仕事についての書」、1539年、地中海でのガレー船の船旅
2. 僧トーマス・デ・ラ・トーレ、「チアパ州の僧侶達が来た時の物語」、1545年、バルトロメー・デ・ラス・カサスに同伴した僧の日記
3. エウヘニオ・デ・サラザール、「書簡」、1573年、友人ミランダ・デ・ロン宛ての書簡
4. 僧アントニオ・バスケス・デ・エスピノーサ、「1622年の旅行と航海の真実の記述。。。」、6ヶ月に渡り、5回の暴風雨に遭遇した物語

16世紀のスペインと西インドにおける計測単位

1. 長さの単位

単位：バーラ	…	0.84メートル
12 ^º フルカ ^ダ	…	1 ^º エ
12 ^º デ ^ト	…	1 ^º ルモ
4 ^º ルモ	…	1 ^º バーラ
3 ^º エ	…	1 ^º バーラ
2 ^º コ ^ト	…	1 ^º ブラッサ
1 ^º レ ^グ ア	…	5.5キロメートル
1海里（ミーリャ・ナチカ）	…	1.853キロメートル

2. 穀類の単位

単位：ファネガ	…	55.5 リットル
12 アルムト ^ゝ またはセミーネ	…	1 ファネガ ^ゝ
1 カカ ^ゝ	…	4 ファネガ ^ゝ

3. 液体の単位

単位：アローバ	…	16.14 リットル
4 クアルティージョ	…	1 アスンブレ
1 アスンブレ	…	2 リットル
1 クアルティージョ	…	0.5 リットル

4. 重量の単位

単位：リブラ	…	460 グラム
16 オサ	…	1 リブラまたはリブレタ (デ・カルネ)
4 リブラ	…	1 アルテ ^ゝ (デ・カルネ)
25 リブラ	…	1 アローバ (11.5 キログラム)
1 カカ ^ゝ	…	2 アローバ ^ゝ
4 アローバ ^ゝ	…	1 キントル (46 キログラム)
20 キントル	…	1 トネラダ ^ゝ (920 キログラム)

16 世紀の貨幣

16 世紀にスペインと西インドに存在した通貨単位にしばしば言及することとなるので、このことについては、物価に関してのいくつかのデータとともに、特に説明を加えることとしたい。

1497 年にカトリック両王によって命じられた改革の後には、金による通貨単位は次の通りである。ドゥカード(*el ducado*)、これはエクセレンテ・デ・グラナーダ(*excelente de Granada*)とも呼ばれ、375 マラベディ(*maravedí*)の価値があった。そして、純金のペソ(*el peso de oro fino*)、これは 440 マラベディの価値があった。そして、金をベースとしたペソには、いろいろのクラスのものがあり、普通金のペソ(*peso de oro común*)、流通している金のペソ(*peso del oro que corre*)、テプスケ (*tepsque*:すなわち銅との混ぜ物)の金、などと呼ばれた。これらのペソの価値は上下したが、300 マラベディに安定する傾向にあった。純金であっても、あるいは単に金をベースにしたものであっても、ペソは 8 トミン(*tomín*)に分割され、1 トミンは 12 グラーノ (*grano*) に分割されると考えられた。すなわち、96 グラーノが 1 ペソを為したが、分割されたものの価値はペソの種類によって変化した。

メキシコで「鉱山の金のペソ」(*el peso de oro de minas*)と呼ばれたものは実際には流通したことは一度もなかったが、私的な取引においてでも、国庫においてでも、会計帳簿上は一つの単位の役割を果たした。ヌエバ・エスパーニャでは、16 世紀の最初の三分

の一世紀以来、貨幣の流通についての勅令が出されている。1535年の有名な指令(instrucción)は初代副王、ドン・アントニオ・デ・メンドーサがメキシコへ赴任する前に渡されたが、この第7項によって、貨幣がないために「金の塊を持ち歩き、店で買い物をする時には、支払のためにそれを切っている」こと、またインディオ達は税金を物で払わなければならないことによって生じている多くの不都合のことがわかる。

まさにこのことによって、彼はメキシコ・シティーに造幣廠を創設する任を負うこととなったのである。(*13) 副王の座につく前であったが、1535年5月11日付けで署名された勅令が彼に送られてきた。この勅令は銀とベリオン(銀と銅の合金)の貨幣が有すべき特徴を規定すると同時に、とりあえずは金貨は造らないことを指示していた。続いて同年同月31日の証書が、これらの新しい貨幣がスペインでも同じ価値を有すべきこと、すなわち、レアルは34マラベディの価値を持つべきことを定めた。(*14) 1537年頃に鑄造が始められたようで、造幣廠はシキピルコ(Xiquipilco)の村に建てられた。副王メンドーサの伝記作者は「一年も経たない内にインディオ達によって銀貨の偽造が行わた」と記している。(*15)

(*13) 1535年4月25日付けアントニオ・デ・メンドーサへの指令、インド総文書館、^パトナート180、^ラモ63、^レウイス・ハンケ(Lewis Hanke) とセルソ・ロドリゲス(Celso Rodríguez)共著「アウストリア家の支配下のアメリカにおけるスペインの副王達」(Los virreyes españoles en América durante el gobiernode la casa de Austria)中にも収められている。

16 および 17 世紀におけるスペインと西インドにおける貨幣のまとめ

- * 銀のレアルまたは金に基づくトミン … 34 マラベディ
- * 金に基づくペソまたは銀のペソ・ドゥーロ … 8 レアル、8 トミン、96 グラーノ、272 マラベディ
- * エスクード … 10 レアルと 10 マラベディ (350 マラベディ)
- * ドゥカード … 11 レアルと 1 マラベディ (375 マラベディ)
- * 純金のペソ … 13 レアルより 2 マラベディ少ない (440 マラベディ)

貨幣の購買力

現在との比較で 16 および 17 世紀のこれらの貨幣の価値と購買力を決めることは極めて難しい。もし、これらの貨幣が有する銀または金の量を基準に採るならば、レアルは(1981年12月で)ほぼ1ドル、8レアルのペソは8ドルである。そして、金のエスクードは46.5ドルになる。

ハミルトン(Earl J. Hamilton)が研究したように、スペインにおいては1530年と1570年の間に価格のかなりの上昇があった。たとえば、基本穀物である小麦は約70%値上がり

した。しかし、ヌエバ・エスパーニャでは、同じ時期にメキシコの基本穀物であるトウモロコシは3倍の値上がりをし、同時に賃金は約400%上がった。一方で、スペインでは賃金の上昇は80%にすぎなかった。

一般的に言って賃金は極めて低かった。ハミルトンはスペイン各地の価格と賃金のインフレの綿密なテーブルを作ったが、ピエール・ショーヌ (Pierre Chaunu) はそれをベースとして、1520年頃に「一人の公証人 (エスクリバノ:escribano) は食事と住居の他に年に1,000マラベディを受け取っていた。一人の徒歩の傭兵 (ペオン:peón) は、職がある時には、5,000マラベディを得ていた。左官の補助は6,000、左官の親方は12,000を一人当たり得ていた。」と計算しており、中級の職人の年間所得を5,000-10,000マラベディと定めるならば、一日あたりの所得は13.7から24.4マラベディであった。

船員の年間賃金は、受け取る食事と住居を考慮すれば、もう少し高く、1543年に船員で9,000マラベディ、事務長が27,000、航海士 (ピロト) が31,500、船長が50,000近くであった。

16世紀スペインにおける航海に関する物価の例

単位：マラベディ

	1519年	1563年	1568年
ビスケット (キンタル)	170	750	612
塩漬け豚肉 (キンタル)	770	2,500	2,380
そら豆とえんどう豆 (ファボ)	162	444	340
米 (キンタル)	485	1,360	1,500
チーズ (キンタル)	940	2,500	2,380
食用油 (アローバ)	302	375	306
酢 (アローバ)	13	136	148
火薬 (キンタル)	2,084	4,125	5,100
鉛弾 (キンタル)	722	1,125	1,020

スペイン船での食事の特徴

- * 野菜、果物の新鮮なものが極めて少なかった。玉葱やニンニクは好まれた。果物は乾燥したもの (無花果、葡萄、あんず、等) と砂糖漬け (マルメロのメルメラダ《羊羹》もあった) が主であるが、生で持ち込まれたものの記録としては、レモン、オレンジ、ざくろがある。オリーブの実。アークチョーク。皮付きのアーモンドの実。
- * チーズは必需品であったが、バターと牛乳は無い。
- * 肉類は生きたまま乗船させた動物としては、雌鳥 (卵も生ませた)、子羊、豚が多い。ベーコン、ハム、塩漬け肉が保存食。
- * 調味料は多用された：肉桂、丁字、芥子、唐辛子、サフラン、パセリ、等。
- * 飲物はワインが主で、一人が一日1リットル程度を消費。
- * 士官の食事は一般乗組員より上等で、黒乾パンのところ白乾パン、塩漬け豚がハム、

未熟ワインのところが上質のシェリー酒。 それに、干しぶどう、アーモンド、鶏、砂糖、新鮮な肉が出た。 1552年に一般船員の一日の食費が25マラバディのところ、士官クラスは34マラバディ。

乗組員は食事が支給されたが、乗船客は自分で持ち込んだ。 鍋、食器（銅製が多用された）、壺の類も持参した。 ただし、水は船のものが支給された。

朝食は冷たい物を食べた。 昼食は天候さえ良ければ暖かい食事が食べれた。 正午の交代番の前の11時頃に薪と木炭でもって竈に火をおこした。

アントニオ・デ・ゲバラ「ガレー船では食べなくなった時に食べに行こうなどという無謀な考えを持つべきではない。 可能な時に、チャンスがある時に行くべきである。 それは、竈のまわりに置かれた鍋、杓子、臼、フライパン、釜、乳鉢、焼き串、土鍋の状況次第だからである。 なによりも、料理番と仲良くならなければ、旅客は新参者のようにすごすごと帰ってくることになる。」

船長、事務長、そしてピロートと書記に対しては主檣と船首楼の間の甲板のスペースにテーブル掛けをした食卓が置かれる。 ユーモラスなもったいをつけて、ボーイが席に着くように呼ばれる。「板だよー。 板だよー。 船長さんに事務長さんに、お仲間さん。 板が置かれたよー。 料理の用意ができたよー。 船長さんに事務長さんに、お仲間さんのために水を使ったよ。 ばんざーい。（ビーバ！）海でも陸でもカスティージャ国王ばんざーい。 面倒をおこす奴は頭をちょん切ってしまえ。 アーメンを言わない奴には、飲み物をやるな。 ちょうど板の時間だよ。 来ない奴は食べるなよー。」

サラザールは、「食べる物は全部、黒坊どもの食べ物（mabonto）のように、腐ってひどい匂いがする。 水でさえも飲む時に感じないようにするために、味覚、臭覚、視覚を無くす必要がある。 さて、食べるのと、飲むのと、これだけの珍味があれば、そのほかに、何がいろいろというものか。 男も、女も、若者も、年寄りも、汚い者も、きれいな者も、誰もが一緒にくっつき合っごった交ぜのくず物(mazamorra)をもらう。 こうして、一緒になって、ある者はあくびをし、ある者はへどをし、ある者は屁をひり、ある者は腹を下す。 昼食をなさっていても、ひどい無礼がなされているとは誰にも言えはしないのであります。 なぜならば、この市の法律はなんでも許しているからであります。」

寝具、衣服

- * 旅行者は毛布、薄い布団、枕を持参した。
- * 僧アントニオ・デ・ゲバラの衣服に関する忠告「乗船前に、丈夫で裏を打ったある種の服を作ること。 これは見た目が良いという代物ではないが、実用的で、これがあれば心おきなく廊下に座り、砲眼に寝ころび、船尾にも近づけ、上陸もでき、暑さを防ぎ、水を防ぎ、更には夜のベッドともなる。 …」

船賃

西インド航路の商業用の船は貨物（銀、金、宝石、貴石、皮、...）を運ぶためのものであり、旅客の輸送は付随的であったので、公的に旅客の船賃が決められたことはなかった。旅客は航海の前に、船の所有者、あるいは船長、事務長と交渉を行って、払うべき料金を決めた。法令では、航海の出発前に取り決めた支払額以上に徴収しないことだけが、決められていた。（Recopilación, lib. IX, título xxxi, ley vii）

アロンソ・エンリケス・デ・ガスマン（1535年にスペインからパナマ地峡を通過して、ペルーへ旅行）：

「余は3月20日に出発した。三匹の馬—彼らの船賃は450カスティヤノ、すなわち各々150ずつ—、四名の下僕、二人の奴隷と一人の女奴隷を乗船させた。下僕は30カスティヤノ、奴隷は20、余自身は船の船室付きで、100カスティヤノあるいはペリテ・ホローこれが最も好まれたが—、四つの箱、1パルセ毎に4カスティヤノ、そしてかなり結構な糧食。」これは合計すると、810カスティヤノで、220,320マラベディ、すなわち587 1/2ドゥカードに相当し、誇張癖のある作者によるも過大すぎる数字と思われる。同じ年に航海をしたドン・アロンソは船室付きで27,200マラベディ、すなわち72 1/2ドゥカードを払っている。

アベリーア(avería)：

海賊に対する防衛策として、軍艦による船隊の護衛が行われるようになり、その費用を捻出する税制が作られ(ベイティエア・リナへによれば1520年)、「アベリーア」と呼ばれた。当初は財貨に対してのみであったが、後には西インドからの貨物全てに対して1%が徴収された。これでも、不足するようになったため、1582年に5%、16世紀末には6%となり、ついには旅客一人につき、銀20ドゥカードが徴収された。(これは一切の例外なく、「下男、家来、奴隷、聖職高位者、民間の頭職者、政府の役人を含む」)

聖職者の船賃：聖職者の船賃は国家が負担した。

船賃（ホセ・カストロ・セアネとペドロ・ホルヘス・モランによるイント総文書館の調査による）(単位:ドゥカード)

エスパニョーラ島行き		ヌエバ・エスパニヤ行き		南米大陸行き	
1508-22年	3				
1523-31	4	1529年	6		
		1530	4		
		1534	6		
1537	5	1535-37	5 1/3	1536-40年	5 1/3
1538-42	5 1/2	1538-44	6	1540-43	6
1548	7 1/2	1545-49	8	1545-48	8
		1550	9 1/3	1549-51	10
1551	8	1550-52	10	1551-52	11
		1553	11	1553-55	16
1555	14	1555	16		
1557	14	1555-57	19		
1560	12	1557-73	17	1557-62	20
1595	14	1559	20	1572-73	22
1597	14	1598	18	1598	24
		1599	20	1599	20

また、聖職者にたいしては国家から旅費の援助が行われたが、その額は宗派によって異なる

った。

聖職者への旅費の援助額

宗派	援助額
アウグスティノ会	1,049 レアル
イエズス会	1,020 レアル
ドミニコ会（下僕を含む）	907 レアルと 10 マラベディ
フランシスコ会履足派	796 レアルと 10 マラベディ
フランシスコ会裸足派	714 と 1/2 レアル

船旅

* サミュエル・エリオット・モリソン著

「Admiral of the Ocean Sea — A Life of Christopher Columbus —」の第3章の冒頭に掲げられたスペインの古い格言

私を感動させる三つのものがある …

空の鷲の道

岩の蛇の道

そして、荒海の船の道

Tres cosas hay que me desbordan…

el camino del águila en el cielo,

el camino de la serpiente por la roca

y el camino del navío en el alta mar.

* 当番と歌：エウフェニオ・デ・サラザールより

交代番は4時間ごと、すなわち24時、4時、8時、12時、16時、20時の6回。

半時間毎にボーイ（paje：パヘ）または見習い水夫（grumete：グルメテ）が砂時計（ベネチア製がよく用いられた。壊れやすいので、各船はかなりの数を持っており、マゼランの旗艦は18個を持っていた。）をひっくり返した。ひっくり返す時に、眠っていなかった証拠として石盤に印をつけ、歌（cantinela：カンティネラ）を歌った。

行くのは良い時（訳注：砂時計のアンブル、すなわち「半時」）

来るのはもっと良い時

一つ終わるが

二つの（アンブル）の中を移る、

もっと移るだろうよ

神様の思し召しがあれば、

数えて過ぎる、

良い旅なされ、

船尾にいて、注意だよ、

良い当直。
Buena es la que va,
mejor es la que viene,
una es pasada
y en dos muele;
más molerá
si Dios quisere;
cuenta y pasa,
que buen viaje fazá;
ah de proa, alerta,
buena guardia.

夜の 8 時の当番が始まる時の歌 :

神が生まれたまいし
聖なる時よ、
聖母マリアがお生みなされ、
サン・フアンが洗礼をなされた。
当直が代わる、
砂時計が移る、
良い旅だろう
神の思し召しなれば。
Bendita la hora
en que Dios nació,
Santa María que le parió,
San Juan que le bautizó.
La guardia es tomada;
la ampolleta muele;
buen viaje haremos
si dios quiere.

真夜中の当直が始まるにあたっては次のように叫んだ :

当直時間だ、当直時間だよ、当番の船員の皆さん。 当直時間だ、当直時間だよ、
当番のピロートの皆さん、ちょうど時間だよ。 もう時間だよ、そら行け、そら行
け、そら行け。

Al cuarto, al cuarto, señores marineros de buena parte; al cuarto, al cuarto en

buen hora de la guardia del señor piloto, que ya es hora; leva, leva, leva.

夜になって、羅針盤を照らすためのカンテラをボーイが運ぶ時に次のように言った：

アーメン、神よ我らに良き夜を与えたまえ。 良い旅を、船がうまく進むように。
船長さん (カピタン:capitán)、事務長さん(マエストレ:maestre)、良きお仲間さん。
Amén, y Dios nos dé buenas noches; buen viaje, buen passaje haga la nao,
señor capitán y maestre y buena compañía.

カンテラを持って行ってしまった後に、「二人のボーイが通り、キリスト教の教義を言い、『我が父』、『アベ・マリア』、『使徒信条』、『聖母賛美』のお経を唱えた。」 第一土曜日が来ると特別敬謙に一同揃って祈祷を行う。 宗教的な像と灯を点したロウソクを並べた祭壇が設けられる。 この時、事務長が「ここに全員揃いたるや」と言う。 これに対して、「神が我らといたもうように」と答えが返ってくると、事務長は答えて曰く：

幸あれ、唱えん、
良き旅ならんことを、
幸あれ、唱えん、
良き旅ならんことを。
Salve digamos,
que buen viaje hagamos;
salve diremos,
que buen viaje hagamos.

この先導の口上の後、乗組員と船客はひどい調子はずれで、「音楽のハリケーンの嵐のように」『聖母賛美』を歌い、連祷した。 これらに続き、小坊主役のボーイに導かれて、その他の祈祷を行い、ボーイは締めくくりに、「アーメン、神よ我らに良き夜を与えたまえ。」と言う。

サラザールは回想している。「我らが眠りは船に砕ける水の音にまどろむことであった。全員がハンモック(アマカ:hamaca)の中でのように揺られることになる。 船の中に入れば、それが百年であろうと、揺りかごを揺らさなければならない。 そうして、時々揺りかごがひっくり返って、揺りかごも櫃も自分の上になってしまう。」 「このように、たった一隻だけの船の中の間人は、陸地を見ることなく、静かならざる空と水を見て、その暗くおどろおどろしい床の暗緑色の王国を進む。 一個所に漂う物を見ることもなく、一隻の船の航跡だに知ることもなく、見た目には同じ地平線を常に経巡るばかりで、夜になっても、朝見たものと同じものを見、今日もまた昨日も同じ、なにも変わったものを見ることもなし。」

カナリア諸島のテネリフエからサント・ドミンゴまで航海をしたヌエストラ・セニョー

ラ・デ・ロス・レメディオ号の乗組み員達が次ぎのような掛け声とともに帆を揚げる様を述べている。(サラザール)「頭(かしら)が言うこれらの一節毎に、他の者は全員、「オー、オー」と答え、帆が揚がるように、綱を外す。」

風よ	buiza
神よ	o Dio
我らをお助け	ayuta noi
我らは	o que sono
お使い	servi soy
空に舞う	o voleamo
お使いしつかり	ben servir
信心	o la fede
守り...	mantenir ...
悪さは	o malmeta
異教徒	lo pagano
一緒くた	sconfondí
サラセン	y sarrahín
トルコにモーロ人	torchí y mori
大mast	gran mastin ...

(この翻訳については、山田が多いに想像力を働かせた所産である。)

サラザールはこれらの言葉は全く、何を言っているかわからない、と述べている。海員達によれば、これらの言葉を常用しているのは、スペインの地中海沿いのレバンテ、バレンシア、ムルシアの人々だと言う。サラザールは、海員の特別な用語を挙げている。

ピロート達の天体測定

サラザール「こうして更に四日間、ガレルノの風(注:スペイン北岸の北西の突風)で航海した結果、船員達はロバが草の匂いをかぐように、陸地の匂いを嗅かいでみて、見当をつけ始めた。この頃、ピロートが星を捕捉するのを見るが、バレスティーリャ(フォルスタッフ)を手にし、ソナッハ(フォルスタッフの棧)を据え付けて北に狙いをつけた結果によって、北から3000とか4000レグアとかを出してくる。次に、見ていると、真昼に自らのアストロラーベを手に取り、太陽を見上げてアストロラーベの照準門(プエルタ)の中に入れようとする。それだけでは終わらせられないので、終には太陽の高度を彼のえいやあの判断に任せることとなる。何度も、あまりに上げるものだから、彼の上が1000度もあることになってしまう。次には這う程に下げるものだから、1000年経ってもここまで着かないことになってしまう。とにかく、度数や点や船が航海したと思われる哩数を旅客に隠しておこうとすることを見るのには、まったく疲れてしまった。もっとも、後になって、その理由がわかったのであるが、その理由というのは、一度たりとも命中する

こともなければ、わかりもしないからなのである。彼らが命中し損ねた狙いの誤りを言い出さない理由があることを私は見知っているのだから、我慢していたのである。その理由は、この道具の留めピン（アルfiler：alfiler）の頭一つのスペースの差が、500 レグア以上の判断の誤りを引き起こすからである。こんな精度なら私でもできる！ おお、この繊細で重要な航海術を極めて雑な判断と、これらのピロート達の手のごとく雑な手に委ねられたことによって、神がその全能を見せられるとはなんたることか！ 彼らがお互いに尋ねあっているのをご覧なさい。「貴殿は何度と測られたか。」一人が「16」と言い、他は「20 足らず」、もう一人が「13 半」と言う。そのあとに尋ねることは「貴殿は陸までどれだけと見られるか。」一人が言うには、「私は陸まで 40 レグアと見ます。」他は「私は 150。」もう一人は「今朝方、92 レグアと見ました。」と言う。3 であろうと、300 であろうと、誰も他の者と一致することもなければ、真実と合致することもないのである。」

不潔さと厠

アントニオ・デ・ゲバラ「お腹をきれいにしたい、個人的な何かをしたい旅客は皆、船首の便所に行くか、銃眼の一つに近づくかしなければならなかった。恥じらわずに言うことはできないことだが—それ以上にこんなに公衆の前ですることができないことだが—食卓でどうやって食べるかを見るのと同じように、便所の中で皆が座っているのを見なければならぬのである。見たところ、この穴を開けた板は船尾に置かれて、『庭(ハルティン)』と呼ばれ、—イギリス人は『婦人の穴(ladies' hole)』あるいは『砲手の納戸 (gunners' store)』と呼ぶ—前方とは何の仕切りもなかった。」大ねずみや冬眠ねずみ (lirón) は船客達の「化粧手ぬぐい、細い薄絹、絹の帯、鼻かみハンカチ、古いシャツ、立派な頭巾、はては繕った手袋まで」自分の寝床にするために盗んでしまう。そしてサラザールは眠っている間に「片方の足と片方の耳」を噛まれた。

ゲバラの報告するように地中海のガレー船には便所があったが、西インド航路の船には未だ無かった。サラザールが航海したヌエストラ・セニョーラ・デ・ロス・レメディオス号には「庭」さえもなく、唯一の手段は空にお辞儀をしながら、船の綱につかまることであった。

サラザール「そこで、処理をしたくなったら、バルガスよ、処理なさい。それには、見習い水夫の部屋 (カステリヨ：castillo) のように海に突き出して太陽や十二宮や月やその他の天体にお辞儀をする。そして、丸太の馬のたてがみにしっかりしがみつきの、もしぶっ放せば、ぐったりなって、もうそれ以上乗り回せなくなってしまう。この椅子のおかげをもって、「何度も糞が尻の穴まで来る」のである。そして、海に落ちることが恐くなって亀の頭のように身を引っ込めて中へ戻るわけだが、綱と人の助けの力を借りて引きずり、引っ張り上げられなければならない。」

トマス・デ・ラ・トーレ神父「普段はいろいろなことを人にしてもらい、下にもおかぬ扱いを受けたり、大切に礼遇されたりしてもらった」僧が「全く黒坊のように扱われた。そ

して、黒人のように甲板の下で寝るために、一番下まで降ろさせられた。床に座ったり、寝転んだまま移動しなければならなかった。しょっちゅう踏まれたが、それも僧服ではなく、あご髭であったり、口であったりした。「あれほど汚く、うめき声で満ちた病院は想像できない。ある者は甲板の下で生きたまま煮られ、ある者は甲板の上で太陽で炙り焼きされ、床に伸びて、踏まれ、足蹴にされ、その汚さは言い表しようがない。」「人に食らいつく無数の虱がいる。」「海の水で洗うと衣服は切れてしまうので洗うこともできない。」「ポンプを使うと、船中に、特に甲板の下は耐えられない臭い匂いがする。その使う回数は船がうまく進んでいるか、悪いかによって多いか少ないかするだけである。」

到着

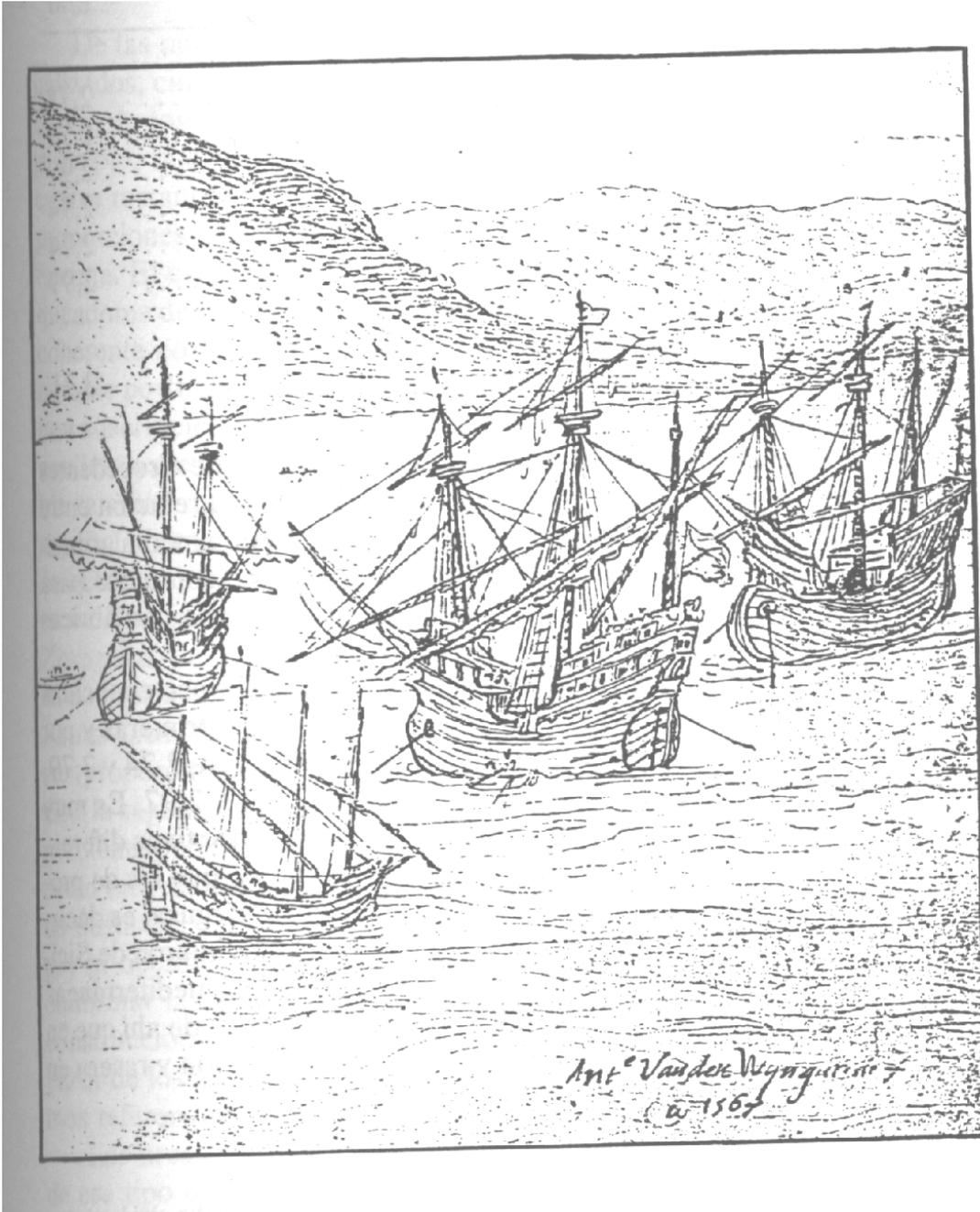
サラザールは最後の手紙でサント・ドミンゴに着いた時のようすを述べている。「翌日、早朝に、お陰を持って、我々は市に入ると、大急ぎで箱を開け、清潔なシャツや上着を取り出し、全員が着飾り、輝くばかりになった。とりわけ、被り物（ケムルト）を掛けて出てきた我が国の御婦人達で、... 海の荒れた時の彼女達から見れば、孫のように若々しく見えたものだ。」

1569年1月25日の勅許状でもって、ヌエバ・エスパーニャとペルーに宗教裁判所が設立され、それ以降は西インドに到着した船に最初に乗船するのは宗教裁判所の委員達で、外国人がいないかどうか、「どのような書物が祈りのために、あるいは読むために、そして暇つぶしのために船に積まれて来たか、そしていずれの言語で書かれているか、禁止されているものが何かないかどうか」（F. フェルナンデス・ステル・カスティージョ編纂「16世紀の書物と製作」）を調べた。その後税関の官吏達が昇ってきた。

以上

同じテーマを扱った最近の書籍

パブロ・E. ペレス・マリアーナ著 「スペインの海員 — 16世紀の西インド船隊の日常生活」（カーラ・ラン・フィリップスの英訳、1998年、ロンドン）



アントニオ・ヴァン・デン・ウィンゲルデ(Antonio van den Wyngaerde)描くところの 1567 年のカディス港のスペイン船

(ホセ・ルイス・カサド・ソト著「16 世紀および 1588 年の無敵艦隊のスペイン船」所載)